

## 近畿の大五芒星はスピン



### しくみ

- 伊吹山山頂 - 熊野本宮旧社地 185.62km
- 熊野本宮旧社地 - 元伊勢内宮皇大神社 186.56km
- 元伊勢内宮皇大神社 - 伊勢神宮内宮 179.88km
- 伊勢神社内宮 - 伊奘諾神宮 171.96km
- 伊奘諾神宮 - 伊吹山山頂 177.43km

### 伊吹山

伊吹山の神は「伊吹大明神」とも呼ばれ、『古事記』では「牛のような大きな白猪」、『日本書紀』では「大蛇」とされていた。『古事記』にはヤマトタケルがこの伊吹大明神と戦って敗れる物語がある。伊吹山の神に苦しめられて敗れたヤマトタケルは病に冒されて山を下り、居醒の泉（米原市醒ヶ井の平成の名水百選の1つに選定されている「居醒の清水」）で少し回復したものの、のちに悪化して亡くなったとする伝説が伝えられている。山頂部にはその日本武尊の石像と、伊吹山の神の白猪の像が設置されている。表登山道の三合目西側の「高屋」と呼ばれる場所はヤマトタケルが山の神に出会った場所とされていて、大正時代に石の祠が建立されその中に木造の日本武尊が祀られた。



また文献によれば、古代には近江国・美濃国の両国で伊吹神が祀られたことが知られる。国史では両神に対する神階奉叙の記事が散見され、中央にも知られる神であった。両神は、『延喜式』神名帳においてもそれぞれ「伊夫伎神社」・「伊富岐神社」として記載されて式内社に列しているほか、美濃の伊富岐神社は美濃国内において南宮大社（一宮）に次ぐ二宮に位置づけられた。現在も近江の神社は伊夫伎神社（滋賀県米原市伊吹）として、美濃の神社は伊富岐神社（岐阜県不破郡垂井町岩手）として祭祀が継承されている。なお、創祀については美濃地方の豪族の伊福部氏との関係を指摘する説もある。

役小角が伊吹山に登り、弥高寺と大平寺を建立したと伝えられている。白山を開山した泰澄は、この山に分け入り白山信仰を伝えた。9世紀に伝わった密教と結びついて修験の場として、多くの寺院が山中に建立されるようになった。851-854年（仁寿年間）に僧三修により、伊吹山の南側の中腹の尾根上に山岳寺院の弥高寺が建立されたことが「日本三代実録」に記録されている。三修（さんじゅ）により山上と山麓に山岳寺院が建立され、江戸時代まで山岳修行の山とされていた。

滋賀県米原市

### 熊野本宮旧社地

「熊野権現垂迹縁起」によると、熊野坐大神は唐の天台山から飛来したとされている。熊野坐大神（家都美御子大神）は、須佐之男命とされるが、その素性は不明である。太陽の使いとされる八咫鳥を神使とすることから太陽神であるという説や、中州に鎮座していたことから水神とする説、または木の神とする説などがある。家都美御子大神について他にも五十猛神や伊邪那美神とする説があり、菊理媛神とも関係する説もあるが、やはりその素性は不詳とされる。古代から中世にかけて、神職はニギハヤヒの後裔で熊野国造の流れを汲む和田氏が世襲していた。創建：不明（伝崇神天皇代、B. C. 33年?）

旧社格：式内社（名神大）、官幣大社（現、神社本庁の別表神社）現在の社地は山の上にあるが、1889年（明治22年）の大洪水で流されるまで社地は熊野川の中州にあった。

和歌山県田辺市本宮町本宮 4 3 1



### 元伊勢内宮皇大神社

『倭姫命世記』に、崇神天皇 39 年、天照太神を奉じた豊鋤入姫命が鎮座地を求めて但波（丹波）国へ遷幸し、吉佐宮を築いて 4 年間奉斎したと記すが、社伝によれば、当神社はその旧跡であり、天照大神が吉佐宮から遷座した後もその神徳を慕った人々が引き続き伊勢神宮内宮の元の宮として崇敬してきたといい、元明天皇朝（707 - 15 年）に社殿を建立したという。また、それとは別に、用明天皇の皇子麻呂子親王が当地の兇賊を成敗するに際して勸請したものであるとの異伝もある（宝暦 11 年（1761 年）の『丹後州宮津府志』所引『天橋記』）。近世以前の沿革は不明であるが、江戸時代には 4 石 3 斗 4 合の社領を有し（天和元年（1681 年）の『宮津領村高帳』）、明暦 2 年（1656 年）に宮津藩主京極高国が社殿を造営し（社蔵棟札）、元禄 14 年（1701 年）に同奥平昌成も修造してから歴代宮津藩主もこれに倣ったといい、また 60 年に 1 度の式年遷宮も行われていた。昭和 5 年（1930 年）府社に列し、戦後は神社本庁に参加している。

京都府福知山市大江町内宮字宮山 217



## 伊勢神宮内宮

天皇が初めて伊勢神宮を訪れたのは、伊勢神宮創建（日本書紀）から一六〇〇年も後に、明治二年（一八六九）三月。この月二八日に行われた東京遷都に先立ち、明治天皇が十二日に外宮、続いて内宮を親拝した。この後も明治五年、十三年、三八年と計四度訪れている。大正天皇は病弱であったために大正四年（一九一五）に一度だけだが、その代わり皇太子、後の昭和天皇が大正四年、五年、八年、十年に二度、十三年と六度、即位後には昭和三年、四年、十七年、二〇年、二七年、二九年、三七年、四六年、四九年、五〇年、五五年と御拝されている。昭和天皇が皇太子時代も含めて二〇回近くも訪れているので、天皇は伊勢神宮に親拝するものという思い込みが誰にでもあるが、明治時代前には誰一人として一度も訪れていないのである。

一〇代崇神天皇は「神の勢いを畏れて、共に住みたまふに安からず。（日本書紀）」と言って、天照大神の祭祀を宮中から外に出したのである。しかも『延喜式（九二七）』に載る宮中三六神の中に、出雲神の事代主の名前はあっても、天照大神の名は無い。宮中の賢所に祀られたのは後世のこと。

明治時代の「国家神道」というものが、いかに日本本来の歴史と伝統からかけ離れた「作られた伝統っぽい文化」だったことの証拠のひとつ。ほとんどの日本人が、古代から天照大神の祭祀こそが、国家最大の祭事であったかのように思い違いをしている。それは古代の大和朝廷ではなく、近代の明治政府が決定したことに過ぎない。<http://ameblo.jp/shimonose9m/entry-12106995436.html>

伊勢市宇治館町 1



## 伊弉諾神宮

祭神は次の2柱。伊弉諾尊（いざなぎのみこと）伊弉冉尊（いざなみのみこと）

両神は日本神話の国産み・神産みに登場する。

『幽宮御記』に祭神は「伊弉諾尊一柱也」とあるため、本来は伊弉諾尊のみを祀ったと考えられる。

『日本書紀』・『古事記』には、国産み・神産みを終えた伊弉諾尊が、最初に生んだ淡路島多賀の地の幽宮（かくりのみや、終焉の御住居）に鎮まったとあり、当社の起源とされる。

明治3年(1870年)に名東県より、それまで2柱だった祭神を伊弉諾尊1柱と定められた。明治4年(1871年)に国幣中社に列格し、1885年(明治18年)官幣大社に昇格した。1932年(昭和7年)、前述のとおり、祭神に伊弉冉尊を合祀することが認められた。

第2次世界大戦後には神社本庁が包括する別表神社となり、1954年(昭和29年)には伊弉諾神社から現在の伊弉諾神宮に改称した。

兵庫県淡路市多賀 740



## 京都御所 清涼殿

南北朝時代（14世紀半ば）から北朝側の内裏の所在地として定着し、明德3年（1392年）の南北朝の合一以後、ここが正式の皇居となって明治2年（1869年）、明治天皇の東京行幸時まで存続した。明治以降は京都皇宮（きょうとうこうぐう）とも称される。清涼殿東廂の南端部には「石灰壇」と呼ばれる場所がある。ここだけは床が板張りではなく漆喰で塗り固められており、天皇はここで伊勢神宮などへの遥拝を行った。京都市上京区京都御苑



## 備考

大きな話題になった近畿の五芒星。平城京の護りとか、そこを選んで作られた京都御所などと噂されている。気にはなっていたけれど、ほかの調査が忙しいのと、そもそもなぜか気が向かなくて保留してきた。近頃、急に興味が出てきたので本当に「しくみ」になっているかを検証してみた。結果、ものの2~3分でまったくピンポイントにはなっていない歪んだ五芒星なことがわかった。各神社間の距離を測ると最大で14kmもの差がある。いちおう構成される三つの二等辺三角形(実際は二等辺ではない)の中心線の交差点もみてみたが、まったく平城京とはずれていた。それどころか中心点が交差し合わない。本来、祭祀線はどんなに古い神社でもピンポイントでつながるので、きちんと交差するはず。京都御所も、かろうじて伊吹山~伊弉諾神宮のライン上には乗るが3km以上もずれている。

これは、本当の「しくみ(祭祀線)」を隠すためのスピン(隠す為には何か別のものを大きく取り上げ、目をそらせる世論誘導のこと。例/スピン報道)に違いない。これにより、祭祀線の信憑性がうばわれたことは確か。歴史家が祭祀線を信じないように仕向けているのだろう。近頃では「レイライン」で検索してもレイラインというゲームソフトがヒットを占領している。支配者を護る陰陽師たちのなんとかして隠そうとする姿勢が見えてくる。

